

# 東大現代文 ハンドアウト

— 第 4 回 (2019 年度 第 1 問) —

氏名：\_\_\_\_\_

## ハンドアウト

### (1) 設問一

#### ① 構文

**Ans.** 傍線部問題は、まず、傍線部以外に着目するのが定石であった。解答を書き始める前に、何よりもまず、傍線部外の「こういった生物の営み」が主語であることを押さえよう。

以上を確定することで、傍線部の主語を確定させることが何よりも先決である。傍線部が何について言っているのかを押さえないと、記述対象が不明確になり、答案も抽象的で曖昧なものとならざるをえない。

#### ② 分析

**Ans.** 「主語（こういった生物の営み）」「ある意味」「自然界では…例外的なもの」

#### ③ 「主語（こういった生物の営み）」

**Ans.** 「こういった」という指示語の指示対象を押さえる。これは前段落の具体例を指す。したがって、「こういった生物の営み」は、前段落を一般化すればよい。前段落のテーマを考えれば、13行目の「生命現象」が使えることが分かる。

#### ④ 「ある意味」

**Ans.** 狙いは「指示対象」。ここを具体化するのが本問の狙い。要は「生命がどういう意味で例外的なのか」を説明できればよい。ここを押さえることで、答案の大枠が完成することに注意。

この手続きを怠るせいで、答案が散漫なものになってしまうのではないか。自分が「何について何を目標として書いているのか」、この点を常に意識してほしい。

#### ⑤ 「自然界では…例外的」

**Ans.** 構文を解きほぐしておこう。「自然界では…例外的」の「例外的」に着目する。「例外的」とは「原則かくなのに、これはしかじかだ」「一般的にはかくなのに、これはしかじかだ」ということである。つまり、「自然界では…なのに」、「生命だけ～」という点で特殊だ、ということである。

また、傍線部は26行目で「極めて特殊で複雑性に富んだ現象」と言い換えられていることも参考にしたい。傍線部の「例外的」は「特殊」と言い換えられることにも気がついてほしい。類似表現や言い換えには敏感であろう。

以上から、答案の大枠としては、「自然界では…なのに、生命だけは～だ。」という構文になることを必ず押さえる。ここができれば、後は「自然界は…」と「生命だけは～」を具体化するだけ。

#### ⑥ 「自然界では…」

**Ans.** まず、傍線部直後の「何故なら」と21行目の「ところが」というディスコースマーカーに着目する。ここから答案の大枠としては、「AなのにBなので、特殊だということ」くらいになることが分かる。「A」で自然界一般の話が、「B」で生命の特殊性が述べられていると考えればよい。

では、「自然界」の「A」であるが、2つの言葉に着目したい。それは、19行目の「はず」と「一般的に言えば」である。どちらも「原則」を意味する表現なので、これらの箇所「自然とは本来…だ」というヒントがあるはず。

まず、19行目の「はず」を含む文からは、「自然とは本来、無秩序、カオスに向かう」という論点を確認する。

次に、19行目の「一般的に言えば」に着目。この表現から、この箇所には一般論が来ていることが分かる。よって、直後の文は参考になるはず。後は、「それを構成する原子間の結合が極めて強いものであり、鉱物や氷といった化学的な反応性に乏しい単調な物質が主なものである。」を整えればよいだけ。

以上の2点から、自然の本来的なあり方については、「1) 無秩序へ変化する世界の中では、2) 原子の結合が強い単調な物質が形として存在する」ということが書けていればよいだろう。

7 「例外的なもの」

**Ans.** 「例外的」を自分の言葉で説明する。ただし、言い換えに着目すれば、26 行目の「極めて特殊で複雑性に富んだ現象」がほぼそのまま使えることに気がつくだろう。要は、「自然現象の中で特殊であること」が書けていればよい。

生命の例外的なあり方は、ディスコースマーカーに着目すれば、すぐに分かる。まず、21 行目の「ところが」に着目。さらに、22 行目の「また」というディスコースマーカーにも着目すれば、その前後の情報が大切であることも分かる。等位接続詞なので、その前後両方とも均等な価値がある。

これらのうち、「ところが、生命はそんな無秩序へと変わりつつある世界から、自分に必要な分子を取り入れ、そこに秩序を与え「形あるもの」を生み出していく」と、「また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり」が、「生命」の記述として使いやすそうだ。

以上の2点をまとめると、(1) 生命が形を生んでいること（無秩序との対比）、(2) それも反応性に富んだ分子の複雑に富んだ現象であること（単調との対比）が必要な要素であることが分かる。

以上の様に、必ずディスコースマーカーや指示詞をヒントに使えそうな箇所を探していく。闇雲に探すのは時間の浪費だし、選択の恣意性を免れない（間違えるリスクも上がる）。

【採点基準 [配点 10 点]】

○自然

- ・ 無秩序へと変化する（2 点）
- ・ 原子の結合が強い（1 点）単調な物質が（1 点）形として存在（2 点）

○生命

- ・ 反応性に富む物質の分子で（1 点）形を生んでいる（2 点）、特殊（1 点）

【解答】

**解答** 無秩序へ変化する世界の中では原子の結合が強い単調な物質が形として存在するが、生命は反応性に富む物質の分子で形を生んでいる点で特殊であること。(70 字) (鉄緑会)

**解答**

**解答**

(2) 設問二

8 構文

**Ans.** 傍線部問題は、まず、傍線部以外に着目するのが定石であった。  
傍線部の主語が「(様々な意味で) 生命 (は)」であることを、まずは、押さえよう。

9 分析

**Ans.** 「(様々な意味で) 生命 (は)」 「秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間に存在する」 「何か」「複雑で」「動的な」「現象」

10 「(様々な意味で) 生命 (は)」

Ans. 傍線部の主語は「(様々な意味で) 生命 (は)」の部分である。ここで注意すべきは、「様々な意味で」とあることから、生命一般が話題となっていることである。「生命の進化」に話題を限定しないようにしよう。

したがって、傍線部を含む段落は、27 行目から進化の例を中心に述べられているが、これらを生命現象一般に一般化して解答できるかどうか、ポイントであった。

次に、傍線部直前の「秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間に存在する」が、傍線部にかかる修飾語句となっているので、この意味も踏まえて答案を作成する。

11 「秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間に存在する」

Ans. とっかかりとして、「のである文」に着目すれば、29～30 行目の「現在の地球上に溢れる、大きさも見た目も複雑さもその生態も、まったく違う様々な生命は、その静的・動的という正反対のベクトルが絶妙なバランスで作用する、その「はざま、から生まれ出てきたのだ。」がヒントになることに気がつく。ここは比喩的な説明を含んでいるので、適宜言い換える。

まず、「はざま、から生まれ出てきたのだ」は比喩なので説明する。これは「カオスの縁」を巡るこの文章におけるキーワードであった。「はざま」は「中間」「二つのものの間」という意味。何と何の間なのかと言えば、具体的には、直前の例(28 行目)の「二つのベクトルの間」の事を指すことが分かる。要は、2 つのベクトルが作用し合うことで、生命現象を生み出しているということ。

次に、「二つのベクトル」を具体化する。これは 32 行目の「秩序に縛られた性的な世界と、形を持たない無秩序な世界」や 27 行目の「生命の持続を可能とする…動的な行為」が使えそう。但し、厳密に言うと「進化」に限定される話ではないので、「行為」という言葉は避けて一般化した方がよいだろう。

12 「何か」

Ans. ぼかした言い方。そこまで神経質になる必要はない。

13 「複雑で」

Ans. まずは、言葉の反復に着目しよう。

「複雑」という言葉が繰り返されている 23 行目と 29 行目に着目する。

23 行目:「また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり、“不動、のものとして作り出されるのではなく、偶発的な要素に反応し、次々に違う複雑なパターンとして、この世に生み出されてくる。”とある。

29 行目:「現在の地球上に溢れる、大きさも見た目も複雑さもその生態も、まったく違う様々な生命は」とある。

これらから、傍線部の「複雑」は、要は、「生命が複雑な仕方生まれ、多様なあり方をしていることを言っていることが分かる。

14 「動的な」

Ans. 反義語に着目する。23 行目に「不動」とある。

23 行目: また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり、“不動、のものとして作り出されるのではなく、偶発的な要素に反応し、次々に違う複雑なパターンとして、この世に生み出されてくる。

「不動」の反対の意味で、「動的」といっていることに注意。要するに、刻一刻と化学反応が進んでいくダイナミックな過程のことを意味していることが分かる。こうした反応から、多様な生命が生み出されていく現象のことを「複雑で動的な現象」と述べているのである。

15 「現象」

Ans. 現れ、あり方。こうした語彙はひとつひとつ覚えておくこと。

【採点基準 [配点 8 点]

○生命 (1 点)

・秩序に縛られた静的な世界と (2 点)、無秩序で動的な世界の (2 点) 間に存在 (1 点)

- ・そこから様々な違ったパターンのもを（1点）生み出す現象（1点）

【解答】

**解答** 生命とは、秩序を維持する静的なあり方と、無秩序へと向かう動的なあり方が絶妙なバランスで作用することで、その多様性を生み出しているということ。（69 字）  
（矢野）

**解答** 生命とは、秩序に縛られた静的な世界と、無秩序で動的な世界の間に存在し、そこから様々な違ったパターンのもを生み出す現象であるということ。（68 字）  
（鉄緑会）

**解答**

**解答**

**解答**

(3) 設問三

16 構文

**Ans.** 傍線部問題は、まず、傍線部以外に着目するのが定石であった。

主語は「それは」である。ここから、この問題のポイントはまず、指示対象の具体化であることが分かる。後は「福音」という言葉の意味とニュアンスをつかんで、答案に反映できるかどうかという、語彙力が試されている。

17 分析

**Ans.** 「それは」「人類にもたらされる」「大きな福音」

18 「それは」

**Ans.** 「それは」は、直前の「このように人類が科学により世界の秩序・仕組みのようなものを次々と明らかにしていけば、世界の姿は固定され、新たな「形」がどんどん生まれていく。」を指す。これを答案として自立化させればよい。(1) 科学が世界を解明する、(2) 無秩序に形を与える、の2点が書けていればよい。

19 「人類にもたらされる」

**Ans.** 人間にとってのメリットであることが明示できていればよい。

20 「大きな福音」

**Ans.** 言葉のニュアンスを説明する表現力が問われている問題。

「福音」とは、「キリストによって人類が救われるというキリスト教の教え」という意味から転じて、「喜ばしい知らせ」のこと。最低限この意味は知っておきたいところだが、本番では「喜ばしいこと」という、いい意味であることが分かっているだけでよいだろう。

むしろ、この問題のポイントは、ここからである。なぜ喜ばしい知らせなのだろうか、その理由を明示できただろうか。その理由が明示できれば、「福音」という宗教的な言葉のニュアンスも自ずと表現できるだろう（1985 年度第 1 問問一の「芸術はまさにそういう人間に対する救済としてある」を説明させる問題は参考になる）。

では、なぜ「福音」という宗教的な言葉が用いられているのか。困ったときは類義語や類似表現を探そう。他に宗教的なニュアンスを感じさせる表現を探してみると、37 行目の「一体、何が起こったのか、不安に思

い、混乱するだろう。実際、古代における日食や月食は、そんな出来事だった。不吉な出来事の予兆とか、神の怒りとして、恐れられてきた歴史がある。」がヒントになる。不安、混乱、不吉、などは宗教的ニュアンスを感じるはず。

特に「不安に思い、混乱するだろう」が使いやすいか。人間はなぜそうなのかということが分からないと不安になる生き物だ。そうした生き物に科学が答えを与えてくれれば、我々人間は安心でき、不安から解放される。その意味での「福音」というわけなのだ。

【採点基準 [配点 9点]】

○科学 (1点)

- ・世界の秩序や仕組みを明らかにする (2点)
- ・混沌の世界に (1点) 確固とした形を与える (2点)

○人類

- ・混沌とした世界を不安に思う (2点)
- ・幸福 (1点)

【解答】

**解答** 科学が世界の秩序や仕組みを明らかにし、混沌の世界に確固とした形を与えることは、混沌とした世界を不安に思う人類にとって幸福であるということ。(69字) (鉄緑会)

**解答**

**解答**

**解答**

#### (4) 設問四

21 構文

**Ans.** 傍線部問題は、まず、傍線部以外に着目するのが定石であった。  
まず、「分からない」世界こそが、が傍線部の主語であることを確認する。

22 分析

**Ans.** 「『分からない世界』こそが」「いろんな『形』、多様性が花開く世界」

23 「『分からない世界』こそが」

**Ans.** 筆者特有の表現なので具体化しよう。  
まず、66行目の「また」というディスコースマーカーに着目しよう。  
66行目：「科学」と、まだ科学が把握できていない「非科学」のはざま  
ここに着目すると、「分からない世界」とは、「まだ科学が把握できていない世界」のことであると分かる。

24 「いろんな「形」、多様性が花開く世界」

Ans. 抽象的な言い方なので具体化する。傍線部直前がヒントになる。

64 行目：「分からない」世界こそが、人が知的に生きていける場所であり、世界が確定的でないからこそ、人間の知性や「決断」に意味が生まれ、そして「アホな選択」も、また許される。

ここを一般化すればよい。「アホな選択」も、また許される、を一般化できたかどうか。これは判断や選択肢の多様性を意味している。つまり、(1)「人間の知性の意義」や(2)「価値観の多様性」に積極的な意義がある世界のことを述べている。

このあたりは、対比で逆の事態を考えて見ると分かりやすい。全てが科学に解明された世界では、頭を使う必要はないし、合理的な決断も一義的に決まってしまうのではなからうか。

以上を踏まえれば、「いろんな「形」、多様性が花開く世界」とは、要するに、「科学が解明できていない世界があるからこそ、人間は知性を働かせ、多様な選択をしよう。逆に、すべてが解明されていれば知性を働かせる必要はないし、選択もすべて決まっているので不合理な選択は許されない」ということだと分かる。

25 本文全体の趣旨を踏まえて

Ans. 以上から、傍線部は「科学が把握できていない部分が残る世界こそが、人間は知性を働かせ、多様な選択をする余地を残す」という意味なることが分かった。後は、問題文の「本文全体の趣旨を踏まえて」という条件に答えるだけである。

そして、この条件は、なぜ「科学が把握できていない部分が残る世界こそが、人間は知性を働かせ、多様な選択をする余地を残す」と言えるのか、その根拠を答えさせようとしていることに気がついたか。

まず、66 行目の「言い換えることができる空間」に着目しよう。「言い換え」は重要なメルクマールであった。そこでは「…多様性が花開く世界」が「…のはざま」言い換えられている。ここで「ピン!!!」と来てほしい。

この「中間的」とか「はざま」という言葉は、本文全体で繰り返し論じられる、本文のテーマではなかったか。ここに気がつけば、あともう一息である。

そこで、これまでの文章の流れを確認しておこう。「カオスの縁」という話題が 12 行目まで導入され、13 行目「この「カオスの縁」という現象が注目されたのは、それが生命現象とどこかつながりを感じさせるものだったからである」とあり、カオスの縁と生命がパラレルに語られた。そしてさらに 35 行目「「生きている」科学にも、少しこれと似た側面がある。」とあり、今度は科学にもその議論が適用される（「カオスの縁→生命→科学」という流れ）。

このような流れを思い出せば、この問題のポイントは「アナロジー」であることに気がつくはずだ。その心は、「生命も科学も中間状態にあるからこそ、多様性を生み出している」ということである。

生命現象＝多様性（秩序に縛られた静的な世界と、無秩序で動的な世界の間に存在）

「同様に」

世界＝多様性（分からない世界と分かる世界）

※どちらも無秩序に「形」を与えようとしている

つまり、「はざまにおいて多様性を生み出している生命現象と同様に、世界が解明されているところとそうでないところがある中間的なありかたをしているからこそ、多様な決断や価値観が生み出される」、というロジックなのである。

26 採点基準

- Ans.
- ・中間の状態が多様性を生み出すというロジック
  - ・中間の状態の説明：生命とのアナロジー（カオスの縁という言葉の理解）
  - ・主語の具体化
  - ・「多様性」の具体化

【採点基準 [配点 14 点]】

○生命（1 点）

- ・無秩序へと向かう自然界で（1 点）秩序を与えようとする（1 点）
- ・それと同様に（1 点）～本文全体の趣旨

○人間の世界

- ・混沌の世界に（１点）科学の力で（１点）確固とした形を与えようとする（１点）
- ・未解明の部分も存在するという（２点）中間の状態（１点）
- ・人間の知性が生き（１点）、様々な選択肢が許容される（１点）複雑性に富む（２点）～傍線部「いろんな「形」、多様性が花開く」

【解答】

**解答** 無秩序へと向かう自然界で秩序を与えようとする生命のように、人間は混沌の世界に科学の力で確固とした形を与えようとするが、未解明の部分も存在するという中間の状態こそ、人間の知性が生き、様々な選択肢が許容される複雑性に富んだ世界になるということ。(120 字) (鉄緑会)

**解答**

**解答**

**解答**

## 参考解答

問一 無秩序へ変化する世界の中では原子の結合が強い単調な物質が形として存在するが、生命は反応性に富む物質の分子で形を生んでいる点で特殊であること。

問二 生命は、秩序を維持する静的なあり方と、無秩序へと向かう動的なあり方が絶妙なバランスで作用することで、その多様性を生み出しているということ。

問三 科学が世界の秩序や仕組みを明らかにし、混沌の世界に確固とした形を与えることは、混沌とした世界を不安に思う人類にとって幸福であるということ。

問四 無秩序へと向かう自然界で秩序を与えようとする生命のように、人間は混沌の世界に科学の力で確固とした形を与えようとするが、未解明の部分も存在するという中間の状態こそ、人間の知性が生き、様々な選択肢が許容される複雑性に富んだ世界になるということ。

問六 a 貢献 b 代替 c 細菌